

VIII 第6の神のことば 「殺してはならない」

出エジプト 20:13、申命記 5:17

20:13 殺してはならない。

出エジプト 20:13

はじめに

十戒の第六戒、第6の神のことばは実に簡潔である。しかしよく考えてみると、あまりにも奥深く難解で幅広い問題に関わる教えであり、聖書の教えるいのちの尊厳の視野の広さに立ちすくむ思いがしてくるのである。たとえば、戦争と平和の問題、妊娠中絶賛否論議、死刑廃止論などであり、自殺をどのように見るのかという問いをはじめ、安楽死や尊厳死などの新しい問題が関係してくる。また生命倫理的課題の脳死と臓器移植の問題など、現代キリスト教倫理の課題が山積している。日々のニュースで殺人、虐待死など命の尊さがいかに傷つけられているかという痛ましい報道があふれており、社会全体が狂ってしまっていると言わざるを得ない。

そこで、ハイデルベルク信仰問答がこの問いについて語っている言葉を手掛かりに学んでみたいと思う。

1. 第6の神のことばにおいて、神は何を望んでおられるか

ハイデルベルク信仰問答 問 105 「第6戒で、神は何を望んでおられますか。」

答 「わたしが、思いにより、言葉や態度により、ましてや行為によって、わたしの隣人を、自分自らまたは他人を通して、そしったり、憎んだり、侮辱したり、殺してはならないこと。かえってあらゆる復讐心を捨て去ること。さらに、自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない、ということです。そういうわけで、権威者もまた、殺人を防ぐために剣を帯びているのです。」(神戸改革派神学校校長・吉田隆訳)

この問答の「殺してはならない」という視野の広さは、「はじめに」の中で先に述べた。本書の中で、前にもノア契約の中でいのちの尊厳について引用した箇所、創世記9章6節を再び取り上げる。「人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。」神はここで、人のいのちの尊厳の根拠は、人が神のかたちに造られていることにありと宣言しておられる。これこそ、時代がどのように移り変わろうと、決して変わることはない根拠である。ノア契約に話が及んだのでいのちの尊厳の理由をここで改めて述べる。人類の始祖アダムに神がいのちを与えられたと創世記2章にある。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった」(2:7)。アダムに与えられた命は私ども一人一人にも与えられている。神はアダムの次の世代から親を通して命を代々継承して私どもに与えられるようにされた。つまり人の命の根源は神であり、その神から両親という媒介を経て私どもに命が伝えられる。神は創造主であるが、親はそ

の創造主からゆだねられて、命を子どもに伝えるのである。先の第五の神のことはにるように、親を敬うことは神を敬うことであると前にも述べた通りである。

神が与えた命を奪うことは神から与えられた命の横取りであって、神の占有権を侵すことになる。神はご自身が独占しておられる命の所有権を奪う殺人行為を禁じられるのは当然である。殺人は神に対する反逆であり、挑戦である。そこには意識の有無を問わず、人間の傲慢がある。動機は神と同じようになろうとする高ぶりでもある。

さらに、神の似姿を与えられた人間の命を損なうことは神に対する最大の反逆である。似姿とは外観ではなく霊的な特性を指し、聖、義、知恵を反映している。殺人はこのような神の姿を損なう行為であって、博愛精神に背く以上のことが示される。

さて、**問答 105**は「自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない」と語る。この場合の「危険」とは何を意味するか。それは滅びの危険であると言って差し支えないであろう。人を殺すということは、実際に人の命をうばうことに留まらず、「そしったり、憎んだり、侮辱したり」することが、すでに厳しく戒められている。つまり、人をそしったり、憎んだり、侮辱したりすることは、殺人行為を生む「根っこ」に当たることと理解すべきである。繰り返しになるが隠れた殺人の動機も裁かれるのである。その結果は、「火の燃えるゲヘナに投げ込まれます」ということであり、まさに滅びの危険である。この危険に対する神の望みを次のことばで知ることができる。

「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」(Ⅱペテロ 3:9)。

2. 第6の神のことは語るのは殺すことについてだけではない

ハイデルベルク信仰問答 問 106「しかし、この戒めは、殺すことについてだけ、語っているのではありませんか。」

答 「神が、殺人の禁止を通して、わたしたちに教えようとしておられるのは、ご自身が、ねたみ、憎しみ、怒り、復讐心のような殺人の根を憎んでおられること。またすべてそのようなことは、この方の前では一種の隠れた殺人であるということです。(吉田隆訳)

「殺してはならない」という神のことは、現代社会の課題であると同時に自分自身を除外できない課題であることを気づかせてくれる。私どもの心の内面に分け入ってくる。「思いにより」、「ねたみ、憎しみ、怒り、復讐心」ということばが心に迫ってくる。つまり、隠れた殺人の動機が暴き出されてくる。主イエス・キリストはこの第六の神のことはから、その本質的厳しさを語られた。誰もがよく知っている山上の説教のことばである。少し長いのであるが以下に引用する。

「昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければなら

ない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることになります。まことに、あなたに言います。最後の一コドラントを支払うまで、そこから決して出ることはできません」(マタイ 5: 21~26)。

誰もが思い当たる心の傷に触るのではないだろうか。私は、愛している妹をバットを振りかざして追いかけた痛い思い出がある。心の中で「殺してやる〜〜〜！」と叫びながら。それも、イエス・キリストを信じてからのことであった。その妹は洗礼を目前にしながら持病のために亡くなった。年末のことであった。年明けの正月に、教会に通っていた妹に洗礼の決断を促すために尋ねる予定をしていた矢先のことであった。妹和美は主の御手の中にあると信じゆだねている。

この教えはわれらの内に秘かに宿る隠れた殺人の芽を摘み取り、根を抜き取り、報復の連鎖を断ち切る強い教えであることを確認したい。

3. 第6の神のことは人を殺さなければそれで十分かと問いかける

ハイデルベルク信仰問答 問 107「しかし、わたしたちが自分の隣人をそのようにして殺さなければ、それで十分なのですか。」

答「いいえ。神はそこにおいて、ねたみ、憎しみ、怒りを断罪しておられるのですから、この方がわたしたちに求めておられるのは、わたしたちが自分の隣人を自分自身のように愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、その人への危害をできる限り防ぎ、わたしたちの敵に対してさえ善を行う、ということなのです。」(同 吉田隆訳)

信仰問答が引用する聖句から。

「互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。キリス

トは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです」(Iヨハネ 3:11~16)。

このみことばから主イエスが私どもの罪のために命を捨て、十字架について、身代わりとなってくださったことによって、私たちは真実な愛を知ったのである。隣人を殺す前に、兄弟を憎む者はみな、人殺しであるというのである。真実な主イエスの愛を信じているゆえに、私たちも兄弟のために自分のいのちを捨てるべきだという厳しい言葉に直面させられる。これは憎しみから自由にされる喜びの告白でもある。

使徒ヨハネは、先の引用聖句で創世記 4 章 1 節に語られている弟アベルを殺したカインの物語を語って、カインのようになってはいけなと戒める。単に人を殺さないというだけでなく、キリストの愛を受けて兄弟を自分自身のように愛し、積極的な神の愛に生きることが神のご意志であることを教えている。問 107「しかし、わたしたちが自分の隣人をそのようにして殺さなければ、それで十分なのですか。」に対する端的な答えである。

さらに、私どもの内に巣くっているねたみ、憎しみ、怒りを断罪しておられるだけでなく、それを乗り越え、敵に善をなすことを求めておられる。それが報復の連鎖を断ち切る真の勝利であるという。

ところで、我が国の憲法 9 条に表わされる国際平和の精神は神の民以外の人々の果たし得ない高邁な神のみ心に添ったものであるといえよう。世界にまれにみる精神を持つ憲法であるが、護憲・改憲の立場を超えて、神の聖意を祈り求めることが第一義的に肝要であると言わざるを得ない。しかしながら、憲法論議はキリスト者、非キリスト者を問わずこのような視点で論じられていないと思われる。ちなみに私は神の契約の民として、聖意に従って受ける苦難を覚悟する真の意味で憲法擁護者であることを表明する。平和の根拠をこの第六の神のことばに求めるとき、そうならざるを得ない。それゆえ福音の宣教こそが神の民キリスト者の平和運動であると確信する。

むすび

最後に次元の違うことであろうが旧約預言者の平和のビジョンがいつの日にか実現することを祈っていききたい。

「主は多くの民族の間をさばき、遠く離れた強い国々に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない」(ミカ 4:3)。